

頭に浮かべながら眠る

萩原良昭

頭に浮かべながら眠る

僕は二分進んだ僕の腕時計を見て「後、二分しかないよ。」と言った。

「なるほど、時間はその通りだ。」と思い、電車道へ向かって、一緒に路地をオッチャラ歩いていたら、大型のバスが、電車通りをスッと通り過ぎるのが見えた。

僕は芦田に、「ほれ、見いや。
こりゃあ、えらいこっちゃ。
二分しかないと言つたやろ。
バス、ちょっとでも、はよ、
来たら終わりやんけ。」
と、ぼやきながら走った。

まあ、努力買われたのか、乗れた。
三条京阪、四時の急行に間に合った。

運転手の後ろから、前方の景色を楽しむ。

等間隔で平行に、精確な距離を
保ちながら、線路は延々にのびる。

「よく、すれないで、精確に
固定できるもんだなあ。」
その様子をずっと見ながら、
僕は関心していた。

寒いので、八時三分、もう床に入る。
空気が冷たいので、ふとんから出す頭は
冷えていて、はつきりしている。
英会話のテープが来ていたが、今日はする気にならず。

